

第 68 回日本生殖医学会学術講演会・総会

O-002

金沢 2023.11.9 10

当院における 17 年間の妊孕性温存治療の現状と課題：乳がん治療前凍結卵子にて 5 年後出産例を含む

藤岡 聡子¹⁾ 井谷 裕紀¹⁾ 福田 愛作¹⁾ 森本 義晴²⁾

1) IVF 大阪クリニック 2)

2) HORAC グランフロント大阪クリニック

【目的】 がん治療前の妊孕性温存療法はその技術の進歩とともに国や自治体の助成金制度の拡充などにより実施件数は増加している。当院は過去 17 年に渡り妊孕性温存に取り組んでおり、今回妊孕性温存の現状と課題について検討した。乳がん治療前に卵子を凍結し 5 年後出産に至った症例を含め報告する。

【方法】 当院で 2006 年から 2023 年 5 月までに妊孕性温存相談で受診した 126 名のうち実際に妊孕性温存を実施した 94 名（卵子凍結 52 名、胚凍結 42 名）について原疾患、初診時年齢、卵子・胚の使用率、妊娠成績について調査した。

【結果】 原疾患別では乳がんが 6 割を占めていた。初診時年齢は卵子凍結が 15～40 歳、胚凍結が 24～42 歳であった。卵子、胚の使用率はそれぞれ 3.8% (2/52)、33.3% (14/42) であった。凍結卵子については融解後に胚移植を行った 2 例のうち 1 例が妊娠・出産に至った。当該症例は 36 歳で乳がん術前に成熟卵子を 6 個凍結、4 年後結婚、卵子 6 個融解、6 個生存、顕微授精後に分割期胚 4 個獲得、2 個を移植し 41 歳で出産に至った。現在分割胚 2 個凍結中であり第二子を希望している。凍結胚については融解後胚移植を 14 例 36 周期実施し 10 例 13 周期が妊娠、6 例 8 周期が出産した。患者あたりの妊娠率は 71.4%、出産率は 42.9%、周期あたりの妊娠率は 36.1% (13/36)、出産率は 22.2% (8/36) であった。

【結論】 卵子凍結は未成年やパートナーのいない症例が対象となるため使用率はかなり低く、凍結胚についても原疾患別で最も多くを占める乳がん症例では長期のホルモン治療が必要となることが多いため使用率は高いとはいえない。現時点での検討では妊孕性温存患者の周期あたりの妊娠率・出産率は通常体外受精と同等であった。近年がん治療までの猶予期間が短い症例であっても IVM（未熟卵体外受精）や卵巣組織凍結などの選択肢も可能であり、がん治療施設と生殖医療施設の緊密な連携による妊孕性温存治療の意義は高いといえる。